中村映子（スクールリーダーシップ開発専攻）

さ れ ど 学 校

１．教育を考える一言

「学校ってところは、閉鎖的なところだと思う。学校って何・・・」

２．背景

この言葉は、20 年近く前に私の友人が、私に向けて発した言葉です。友人の息子は、小学校入学直後から卒業間近までの 6 年間、いじめを受け続けました。当時、私は、教員をしていて、友人からいじめの相談を受けていましたが、「担任や学校に相談するように」というアドバイスを続けました。私は、教員という立場からも、きっといじめがなくなるよう解決されるだろうと「学校」に期待をしていたのです。友人は担任に訴え、クラスが変わるたびに「今度こそ、いじめがなくなって欲しい」と期待し続けましたが、陰湿ないじめはエスカレートするばかりでした。しかも「教室や学校内で、どのようなことが起きているのか、どのような対応をしてくれているのか、ほとんど伝わってこない」と嘆くこともありました。いじめの情報は、学校からよりも本人や周囲の子どもたちからのものが多かったのです。卒業間近になり中学校での生活を心配した友人の夫が「もう学校はあてにならない」と、いじめを続ける子どもたちの家を一軒一軒訪問し、保護者と本人にいじめを止めるよう頼んで回りました。すると、翌日から、いじめはぴたりと止まりました。

友人は私に「どうして、学校は 6 年間も解決できなかったのか。学校ってところは、つくづく閉鎖的なところだと思う。学校って何・・・」と問いました。友人の痛みとこの問いは、共有しなければならないものでした。

３．考察

現在もいじめはなくならず、新たにネット上での陰湿ないじめが深刻化しています。友人の子どものように、いじめに苦しんでいる子どもたちが今もどこかにいるかと思うと、とても心が痛みます。さらに、不登校、学級崩壊なども依然として大きな問題です。以前、我が子の不登校で苦しんでいる保護者の方から「たかが学校でしょう」と問われ、「されど学校と思ってもらえるような取り組みを地道にしていくことで応えていきたい」と話したことがありました。心の奥深いところでは、我が子が楽しく学校に通う姿を望んでおられるはずと想像しましたが、残念ながら、学校がその願いに応えることができなかったために「たかが学校」と思わざるを得ない苦渋の訴えと受け止めました。この訴えは、20 年前の友人と同じく、私に「学校って何だろう」と問いかけました。

浜田（2012）は、「これまで自明のものとされてきた学校の「正統性」が揺らぎをみせている」と指摘しています。公立学校の役割は、保護者の経済的な理由等に関係なく、全ての児童生徒に対して開かれた場所としてあることです。「開かれた学校」づくりや「学校のアカウンタビリティ」などの教育改革は、学校組織文化の「閉鎖性」を打破することができるのでしょうか。「学校（教育）って何だろう」の問いは、今日も続いています。

引用文献

浜田博文『学校を変える　新しい力』小学館、2012 年、p.32